

複合辞ニツケテの接続助詞用法について

—現代語と中古語を比較して—

辻本 桜介

1. はじめに

活用語に付いて接続助詞相当の働きをするニツケテという複合辞がある(注1)。(1)は現代語の、(2)は中古語の例であり、両者とも、知覚的な動作を表す述語に付いて後続内容が感情や思考に関する事態である。中世・近世にもこのようなニツケテの用法が確認できることから(注2)、ニツケテは古代から現代までの通時的な繋がりを持つ複合辞であると思われるが、その用法は今のところ詳しく分析されたことがない。

- (1) 今日の農村のスプロール状況や損なわれた景観を見るにつけ、私は大きな悔いを覚えております。(衆・168回)
- (2) 上臈どもみな参う上りて、我も我もと装束き化粧じたるを見るにつけても、かのみ並み屈じたりつる気色どもぞあはれに思ひ出でられたまふ。(葵・2・61)

名詞に接続して格助詞相当の働きをするものもあるが、本稿は、このように活用語について接続助詞相当の働きをする用法を考察の対象とする(注3)。

形態に関しては、現代語と中古語の両方を見渡すと、接続助詞テをつけない形式「ニツケ」、係助詞・副助詞がついた「ニツケテ(+モ・ハなど)」、丁寧体の形式「ニツケマシテ(モ)」がある。以降では、こうした諸形態は、それぞれ個別に扱う必要がある場合を除いて、一括してニツケテと呼ぶ。また、古代語の用法の分析が実例にのみ依拠して行われるのは当然のことであるが、現代語においても古い語法となってきたためか筆者の感覚では内省的な判断が難しいので、実例の収集のみによって考えることにする。

以上の前提に立ち、本稿の構成は次のようになっている。まず次節で先行研究について触れ、3節で現代語におけるニツケテの実例を分類し、中心的用法が先行研究で取り扱われている用法、すなわち前件が後件で示される思考・感情の契機となるタイプ(本稿ではこの用法を感情の契機と呼ぶ)であることを確認し(注4)、意味と形式に注目し

てそこから 5 つの派生的用法が出るという考察結果を示す。4 節では、源氏物語を資料として中古語においても感情の契機の用法がニツケテの中心的用法であることを確認した上で、現代語の感情の契機の用法に見られる基本的な性質のうち 3 つの性質(反復の意味を持つこと・前件と後件の主体が一致して前件事態が感覚的刺激を表すものに限られること・前件述語は基本形で現れて助動詞が後接しないこと)が、中古語の場合には認められないことを示す。5 節は現代語と中古語のまとめと考察である。

2. 先行研究

いまのところ、ニツケテの詳しい分析を行った論考は見当たらない。管見に入る限り、ニツケテの意味・用法に関しての記述としては、網羅的に現代語の複合辞を集めて記述する試みの一つとして、簡単に用法を紹介する程度のものであるに過ぎない。それらのうち、最も客観的で詳細な記述を行っていると思われる日本語記述文法研究会編(2008)によるならば、ニツケテの意味と用法は次の①～③に要約される。

- ①前件：動詞の基本形(「見る」「聞く」などの知覚動詞)に付き、丁寧形～マスには付かない(注 5)。
- ②後件：主節は平叙文に限られ、述語は「思いだす」「悲しくなる」「うれしくなる」「悔まれる」などの思考・感情を表す動きに限られる。
- ③意味：反復を表し、感覚的刺激などが、常にある感情を引き起こすことを表す。

①～③の記述に当てはまる典型的な例は次のようなものである。

- (3) 私は、このような景色を見るにつけ、かつての美しい農村風景はもう見られな
いという悲しい思いがわくのであります。(衆・147 回)

(3)は、「～を見る」という知覚動詞の基本形で表された感覚的刺激が反復的に発生し、そのたびに後続する「～という悲しい思いがわく」という感情を表す動きがあるということを表している。類例を挙げる。

- (4) また、自民党長崎県連の違法献金問題が突きつける現政権の腐敗体質を思うにつけ、心配の種もつきまといます。(衆・156 回)
- (5) 連日、東北地方の様子を報道で見るにつけ、心が痛んで不安が募る。
(2011.03.31 東京朝刊 13 頁)
- (6) 自分がその娘のことをあまりかまわなかったと思うにつけ、居ても立ってもい

られない気持に陥るのだった。

(新潮・楡家の人びと)

しかし、現代語における実例においては、実例の中には①～③を満たさないものも見られる。それについては次節以降で詳しく見ていくことにする。

また、史的研究においても、管見に入る限りでは詳しく用法を分析したものはない。山口(1980)は、中古語のニツケテについて、前件が主体の行為を表し、その行為を機縁として主体の遭遇する事態を後見に表す関係、すなわち「機縁性」を持ったものとし、山崎・藤田(2001)は、ニツケテの出自に関して「本来は、「～をきっかけとして」といった意味が基本かと思われる」として山口(1980)の「機縁性」に近い性質を本来的な用法と推定しているが、いずれも特に詳しい用例分析は行っていない。

3. 現代語のニツケテ

本節では、現代語のニツケテの用法を実例に基づいて分類する。調査資料には、小説として新潮文庫の100冊・明治の文豪・大正の文豪(いずれもCD-ROM版)、話し言葉として国会会議録、標準的な書き言葉として毎日新聞を選び、対象範囲(注6)における全例を取った。採取した用例は、動詞接続と形容詞接続とに大別し(注7)、さらに動詞接続用法は後件の意味内容により6つの下位分類を設けた。すなわちA感情の契機・B不可避判断の契機・C疑問の契機・D主張の契機・E機会例示・F漸進的変化の6つである。本節では、これらの6つの用法について詳しく見ていく。また、例数の比較として、田中(2010)などが反復を表す類義形式として挙げているタビニについても、例数の比較のため調査資料の同じ範囲における全例を計上した。これらを一覧にしたのが表1である。

まず、用例分布の実態から、ニツケテはそれほど使用頻度の高い形式ではないことがわかる。国会会議録ではタビニ348に対してニツケテ233と少なからず使用されているが、他資料ではタビニに比べて圧倒的に少ない。ただ、日常的な言葉遣いとは異質な部分も多いものの話し言葉を収録している国会会議録において比較的用例が多いという事実は、日本語記述文法研究会編(2008)の「やや書きことば的」という指摘と矛盾するものと思われる。

3. 1. 動詞接続の用法

まず、現代語において、前件述語と後件述語に着目し、動詞接続のニツケテを7つに分類する。しかし、実例の中にはいずれの分類枠に入れるべきか迷うものもあり、7つの用法は截然と区分できるものではなく意味・用法上の連続性を持つと見られる。以下

※感情の契機(二例型)は「～ニツケ～ニツケ」をまとめて1例として計上 ※同じ後件にかかる2つのニツケテは2例として計上		明治の文豪	大正の文豪	冊 新潮文庫の 100	国会会議録	毎日新聞
動詞接続		31	82	24	227	62
形容詞接続		7	0	8	6	2
動詞接続用法の 下位分類	A 感情の契機	20	61	20	168	60
	感情の契機(二例型)	2	6	0	1	0
	B 不可避判断の契機	1	1	1	28	0
	C 疑問の契機	1	0	1	7	0
	D 主張の契機	0	0	0	16	0
	E 機会例示	1	10	1	2	1
F 漸進的変化	4	4	1	5	1	
ニツケテの全例数		38	82	63	233	64
類義形式タビニの全例数		326	285	417	348	1021

表1：現代語の各資料における例数

で、それぞれの用法について詳しく見ていく。

3. 1. 1. A 感情の契機

まず、次の(7)～(11)のように、後件が思考・感情を表す内容になるタイプは、前件がその感情の起こる契機となった事態を述べるものなので、この用法を感情の契機と呼ぶ。典型的なものは、日本語記述文法研究会編(2008)の記述にある①～③のような性質をもつ。

この用法は、管見に入る限り全ての先行研究で取り上げられており、その例数から考えてもニツケテの中心的用法であると考えてよいものである。動詞接続のニツケテは全資料で426例あるが、そのうち338例(約79.3%)を占めており、中心的・基本的な用法であることがわかる。特に、毎日新聞の例は62例中60例がこの用法に分類すべき

ものであり、現代語の標準的用法であると位置づけてよいと思われる。

前件は、先行研究の指摘のとおり感覚的刺激に関する事態であり、述語として「見る」「思う」「考える」「知る」といった知覚動詞が用いられることが多い。前件事態の主体と後件の思考・感情の主体は一致し、前件内容であるその主体に対する感覚的刺激が要因となって同一主体に何らかの思考・感情が起こることが述べられる。前件述語は常に基本形で用いられてテンスが分化せず、前件の感覚的刺激とそれを契機とする後件の思考・感情が発生するという一連の事態が反復的事態として解釈される点が特徴的である。後件が文末に現れる場合には平叙文となり、意志・希望・命令等を表す文にはならない。

(7) こんな二枚の写真を見るにつけても、彼は都会の方にいる子供等の成長を何よりの楽しみに思った。
(大正・夜明け前)

(8) 最近の福田総理の力のない後ろ姿を見るにつけ、もはやこの人には政権担当能力がないと痛感したのは私一人ではないと思うのであります。(衆・84回)

(9) こうして人と書の拘わり合いを思うにつけ、現代の我々はもっと文字を大切に扱っていかねばならないと思っています。

(2011.02.02 地方版／岡山 19頁)

(10) 私は、狭い国土を思うにつけ、そして、国土の％の土地に全人口の三分の一以上が生活しているわが国の今日の国土利用のあり方を考えるにつけ、生活空間、生産空間としての土地を、国民全体の貴重な資源として、社会的に有効に利用していかねばならないと痛感いたします。(衆・93回)

(11) かつての太平洋戦争で、わが日本は、史上初めての原爆を広島、長崎に投下され、何十万人の犠牲者を出し、これが戦争終結の直接の契機となったのでありますが、それから十年余を経過した今日、なおまだ、当時の原爆被災者中の生存者が数多く病床にあり、さらにまた、その中には、今日、死の道をたどっている犠牲者もあることを知るにつけ、この核兵器の恐るべき殺戮力と、かつまたその響力の強大さに驚くのであります。(参・24回)

次の(12)のように、前件の述語が知覚動詞ではない場合もあるが、この場合でも前件の主体と後件の主体は一致しており、前件が主体に対し感覚的刺激を及ぼす事態として解釈される。(13)では、前件も後件も主体は「岸本」である。

(12) 愛子の報告を読むにつけても、岸本は子まで成した節子と自分との関係が如何にこの二度目の結婚に影響して行くかを想わずにはいられなかった。

(大正・新生)

このように、後件が思考・感情を表す場合は、前件はその機会を表すものであり、①～③のような文法的特徴が見られるのが標準的な用法であると見てよい。感情の契機を表すニツケテは、以上の点においては先行研究の指摘通りの特徴が認められ、例数からしても明らかにニツケテの中心的・標準的な用法として位置づけられるものである。

なおこの用法では、次のように、意味的に対になる動詞 V1 と動詞 V2 を用いて、V1 ニツケ V2 ニツケという形が使われることがある。(16)のように、V1 ニツケ V2 ニツケを 2 組列挙するものも見られた(注 8)。このタイプは、接続助詞テの後接したニツケテという形で用いられることはなく、固定的な型が決まっているようである。

- (13) こういうことを聞くにつけ見るにつけ、胸の張り裂ける思いがいたすのでござ
います。 (参・1回)
- (14) 葉子は絶えず腰部の不愉快な鈍痛を覚ゆるにつけ、暑くて苦しい頭痛に悩ま
されるにつけ、何一つ身体に申分の無かった十代の昔を思い忍んだ。
(大正・或る女)
- (15) 嬉しそうに人のそわつくを見るに付け聞くに付け、 またしても昨日の我が憶出
されて、五月雨頃の空と湿める、嘆息もする、面白くも無い。 (明治・浮雲)
- (16) 何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑うにつけ、
面白がるにつけ淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。
(大正・小さき者へ)

以上は A 感情の契機の用法において大勢を占める用法を記述したものであるが、用例を詳しく見ていくと、「反復」の意味を持つ点と、前件が主体への「感覚的刺激」に関わる事態であるという 2 点には、多くはないものの反例が指摘できる。

まず「反復」の意味に関しては、前件や後件に状態性の述語が現れるものは「反復」の意味を取りにくいものと思われる。(17)の前件は、「火を焚く想いがある」という状態的な述部を持ち、動的に何度も繰り返されるものとは解釈できない。また(18)の後件述語は「恐ろしかった」であり、(19)の後件述語は「去りたかった」である。これらもやはり状態性の述語であり、日本語記述文法研究会編(2008)が示すような感情の「動き」が述べられたものではないため、反復の解釈がなされにくい。また、前件と後見の意味から、反復とは考えられない例もある。(20)では、前件に関して何度も同じ噂を聞くという反復的事態はありえても、「気が変わる」という事態も反復的に起こっているというのは自然な解釈ではない。(21)は、下線部で「今日」という時間的限定の加えられているため、一回的事態としての意味で捉えるしかない。

- (17) 一家の主人でありながら、家内の事が万事事の如くにならぬ焦燥さに、心中で

は火を焚く想いがあるにつけても、ああ、人生誤って養子の身となる勿れと、ツイ我身の上が歎たれる。(明治・其面影)

- (18) 少年の思い入ったような態度を見るにつけて、私には凡てが恐ろしかった。(大正・小さき者へ)
- (19) それを聞くにつけても、三吉は早く去りたかった。(大正・家)
- (20) 叔父叔母の顔を眺め、若い人達の噂を聞くにつけても、豊世は気が変って、途次考えて来たようなことは言出さなかった。(大正・家)
- (21) こんなことをここに書きつけて見るのも他ではない。あの滝田君の記憶と中央公論とはわたしには引きはなして考えられないものであり、今日わたしたちがこの集のために作品を持ち寄るにつけても、一片懐旧の情禁じがたく、同時に滝田君が後継者としてその仕事を幾倍かに上げた嶋中君に望むことも多いからである。(大正・市井にありて)

次に、前件の「感覚的刺激」に関しては、前件の主体と後件の主体が一致しない場合が確実な反例となる。(22)の前件の主体は「人材ビジネスをめぐる政治と金にまつわる問題」で後件の主体は話し手である。(23)の前件の主体は「妙子」であり、後件の主体は語り手である。

- (22) 人材ビジネスをめぐる政治と金にまつわる問題が明らかになるにつけ、人材派遣業が健全な労働市場を利権でむしばむ実態に、腹立たしい思いを強くいたします。(衆・156回)
- (23) で、意見かたがた然るべき嫁もあらばの気構えで、此度母親が上京したので、妙子が通う女学校を参観したと云うにつけても、意のある処が解せられる。(明治・婦系図)

このように前件と後件の主体が一致しない例は、調査範囲を広げればそれに応じて次のように類例を見出すことができるものの、調査範囲内においては動詞接続のニツケテ426例のうち11例(約2.6%)と多くはなく、標準的な用法とは考えにくい。ただし、通常、前件は後件と一致する主体に対する感覚的刺激を表すものであるから、こうした明らかな反例があることには注意される。

- (24) 阪神大震災(兵庫県南部地震)における自衛隊の初動の遅れが指摘されるにつけ、今の自衛隊のあり方が残念でならない。(1995.02.01 東京朝刊 5頁)
- (25) 息子が4歳にして「エアコン! エアコン!」とせがむにつけ、「パパの子どものころにはなあ〜」と言いたくもなる。(2001.08.04 大阪夕刊 3頁)

- (26) マスコミなどで連日のように高齢者の孤独死、介護や看病に疲れた老夫婦の無理心中など痛ましい事件が報道されるにつけ、暗たんたる気持ちになる。

(2009.10.09 東京朝刊 15 頁)

筆者は、感情の契機を表すニツケテに関して、ここに示した例外的な用法は、単なる誤用や現代語において臨時的・派生的に用いられるものと捉えるのではなく、通時的観点から説明すべき古い用法の残存と見る方が妥当であると考えている。そのことについては、4 節で中古語の動詞接続のニツケテと比較することにより明らかにする。

3. 1. 2. B 不可避判断の契機

以下では、感情の契機を表すニツケテ以外の用法を順に見ていく。

次のように、後件では話し手による不可避だという判断を表す文が用いられ、前件の事態はそのような話し手の判断の契機となる感覚的刺激を表すものがあり、本稿では不可避判断の契機を表すものとして分類した。この用法の後件述語は「～しなければならぬ」「～せざるをえない」「～必要がある」「～べきだ」といった形式になり、前件述語は後件の判断を行う主体による知覚を表すものが現れる。(27)では、前件で話し手が「それを見る」という知覚動作を行い、その知覚が契機となって後件の「～ねばなりません」という不可避的表現で表される判断が下されている。(28)(29)(30)も同様に解釈できる。

- (27) それを見るにつけても、政治資金規正のための一層厳格な措置はいまや緊急と言わねばなりませんが、それにしては、今回の政府原案は全く不徹底ではありません。(参・75 回)
- (28) これらの経緯を見るにつけ、菅内閣が、成長戦略を含めた経済政策に関する基本的理念や戦略性を全く持ち合わせていないことが改めて明白になったと言わざるを得ません。(衆・177 回)
- (29) こうした現状を見るにつけまして、一昨年九月、ニューヨークで開かれました G5 を振り返ってみる必要があります。(衆・108 回)
- (30) 以上、本法案への政府・与党の無責任きわまりない姿勢を見るにつけ、これを本院において否決し、真に必要な年金制度の抜本改革を行うべきです。(衆・171 回)

この用法は、A 感情の契機から派生的に表れたものと思われる。A 感情の契機の後件では、思考・感情が発生したという事態を事実として叙述するものであるが、この後

件の思考・感情の内容が不可避的判断である場合、それを相手に強く述べようとした結果、臨時的・直接的に後件に現れたのがこの B 不可避判断の契機ではないかと考えられる。また、後件に注目すると、(31)のような例は A の用法と B の用法の間の連続性を示すものであると思われる。(31)は A の用法として分類したが、後件の「～ざるを得ません」という形は、感情が不可避的に発生したものであることを示している。

- (31) 歳出削減については、はかばかしい実績が見られないことは先ほど申し上げたとおりであります。こうした状況を見るにつけ、一世を風靡した事業仕分けとは一体何だったのかという思いを強くせざるを得ません。(衆・178 回)

なお、表 1 に示したように、この用法の実例は話し言葉の資料である国会会議録に多くみられ、口頭語で臨時的に現れやすいようであるが、調査範囲を広げると次のように書き言葉での例も見出せる。

- (32) 公私の区別がつかず、あまりに歴史を知らない子供を見るにつけ、日本人としてのアイデンティティーの確立が必要だ。(2002.12.26 地方版/福岡 20 頁)
- (33) さまざまな問題について考えるにつけ、より安定した予測可能な状況が生まれるには経済状況が変わらなければならない。(1991.07.18 東京夕刊 3 頁)

3. 1. 3. C 疑問の契機

次のように、後件に疑問の形式「～か」が現れるものは疑問の契機を表すものとして分類した。前件は、後件の疑問を持つ主体と同じ主体の感覚的刺激であり、B 不可避判断の契機と同様に、A 感情の契機と連続的なものと考えられる。後件の疑問形式は、(34)(35)のように反語的な用法で話し手の判断を伝えるものや、疑問詞を含むものでも、(36)のように「～を示すべきだった」という当為的判断を含意していたり、(37)のように「可能ではない」という判断を含意するものであり、話し手が判断を保留している通常の疑問文は用いられた例は見られなかった。

- (34) 災害列島日本の現実を見るにつけ、公的支援、個人補償制度を実現することは、まさに政治の責任ではありませんか。明確な答弁を求めます。(衆・150 回)
- (35) また、支援の対象は諸外国の軍隊等に及んでおり、活動する自衛隊員や家族の心情を思いはかるにつけても、国民の代表である国会の意思をしっかりと受けた形で任務に当たられることが本来の姿ではないでしょうか。(参・153 回)
- (36) このたびほどの大失態に際して、ろうばいの極に達した国鉄職員の混乱ぶりと、

絶えず国鉄の将来を説いてうむことなく、東海道新幹線建設に一生を託した老総裁が、涙を流してむざんな遺体の前にひれ伏す姿を見るにつけて、なぜ小さな人身事故についても同様な態度を示さなかったのであろうか。(参・40回)

- (37) しかし、盛りだくさんなこの学習内容を理解するだけでも精いっぱい、あるいはそれすらできない、いわゆる落ちこぼれの出ている現状を見るにつけても、次代を背負う若者たちに創造の世界を期待することが果たして可能かどうか。(参・87回)

この用法も、表1にあるように、話し言葉である国会会議録の用例に偏るうえ用例の数は多くなく、標準的な用法の一つと見るよりは、B不可避判断の契機と同様に、A感情の契機から派生的に出たもので、後件で話し手の思考・感情の内容部分である疑問(の形で表現される判断)がそのまま臨時的に直接現れたものと思われる。

3. 1. 4. D 主張の契機

次のように、後件に思考・感情を述べるものではない平叙文が現れるものがある。これらの後件は、聞き手に対する主張という行動的意味合いがあると思われ、その主張を行なう契機が前件の感覚的刺激であると解釈できる。このようなニツケテは主張の契機を表す用法として分類する。この用法も、前件に話し手の感覚的刺激が述べられて後件の契機を表す点でA感情の契機の用法と連続的であり、表1にあるように国会会議録のみで確認できたものである。

- (38) 社会党のこの予算大綱を見るにつけても、まだまだ社会党は現実政党ではない。(衆・26回)
- (39) 今日に至るも四次防の骨組みすら固まらないことを見るにつけても、佐藤内閣に国防を口にする資格はありません。(参・68回)
- (40) サラリーマンの税負担が極めて重い現状を見るにつけて、政府の見込みを超えた取り過ぎた税金、すなわち自然増収は減税として返すことが当然の理であります。(参・112回)
- (41) しかしながら、過般のバングラデシュの大洪水、フィリピンのピナツボ火山その他の大規模な自然災害の例を見るにつけても、我が国がより有効で、組織的で、そして迅速な救いの手を差し伸べることが急務であることも事実であります。(衆・122回)
- (42) このたびの兵庫県南部地震によって寸断された山陽新幹線や阪神高速道路などを見るにつけて、一本の幹線が寸断されても日本外島が麻痺しないように代替機

以上までで見た B・C・D の各用法は、話し言葉において A 感情の契機から派生したものであるという見通しを示したが、本項の最初でも述べたとおり、A・B・C・D の各用法は、截然と区別できるものではない場合もある。例えば(40)の例は D 主張の契機に分類したが、後件の述部である「当然の理であります」の意味は B の後件述部の特徴である不可避判断に近いものと思われる。

3. 1. 5. E 機会例示

次のように、前件は後件事態が起こる複数の機会の一例となっているものは、機会例示として扱う。これは、A・B・C・D の用法とは異なっており、前件・後件とも思考・感情・感覚的刺激に関することとは限らない。(43)では、人差し指を負傷したことで衛生上の注意をはらう複数の機会が生まれたが、「五番町へ行く」という機会をその一例として示している。(44)では「年月日と関係する数字が必ず明記される」として著者が数字を明記する複数の機会があることを示し、後続の文でニツケテの前件はその機会の一例を挙げ、後件は数字が明記されているという事態を述べている。前件として例示される機会は、(45)のように2つ現れる場合もある。この用法では、特に前件述語の種類に制限があるとは思われないが、(46)(47)のように、前件述語に知覚動詞が現れる例については、優勢な用法である A 感情の契機のニツケテの前件述語が知覚動詞に偏ることが誘因となっている可能性がある。

(43) きょう掃除のあいだに、人差し指が箒の藪に傷つけられたとき、こんな些細な傷さえ不安の種子になった。〔中略〕指の傷は幸いに膿を持たず、きょうはそこを押すと微かに痛むだけであった。五番町へ行くにつけても、私が衛生上の注意を怠らなかつたのは云うまでもない。 (新潮・金閣寺)

(44) 本書の展望は第二次大戦後の全世界に及び、アジアはもちろん、欧米、中東、ロシア、アフリカに広がっているが、驚かされるのはそのなかの重要事件が網羅されたうえ、年月日と関係する数字が必ず明記されていることである。国連における日本の平和維持活動を論じるにつけても、その予算と要員抛出の国際比較、歴史的な増減、現状の貧寒ぶりがすべて実数と百分比を添えて示されている。 (2011.06.05 東京朝刊 9頁)

(45) ですから、骨肉の旦那様よりか、他人の奥様に憎悪が多く掛る。町々の女の目は裹るにつけ、譏るにつけ、奥様の身一つに向いていましたのです。

(大正・旧主人)

- (46) お妻の父親もわざわざやって来て、炉辺での昔話。煤けた古壁に懸かる例の「山猫」を見るにつけても、亡くなった老牧夫の噂は尽きなかった。(大正・破戒)
- (47) 私は民生委員の一人といたしまして、引揚者に対するでき得る限りの救護を盡させて頂きましたが、帰國して失望落胆せる方を見るにつけても、太常洋の底に沈んで引揚げようもない者のあることまで、実は私の実子もその一人ではありますが、ということなどを申して且つ励まし、且つ元氣を出して頂くべく更生の途の御相談に應じたことでありました。(参・2回)

この機会例示の用法では、後件の内容が反復的事態として解釈されるが、前件は一つの具体的な機会を例示するに過ぎない点で A 感情の契機の用法と異なっている。この用法は、次の(48)(49)のような名詞接続の用法と連続的であると思われる。名詞接続のニツケテは、次のように「何かにつけて」「万事につけて」といった形で、「あらゆる機会に」というような意味になる用法がある。名詞接続の用法は「あらゆる機会」として一括する慣用的な表現であるが、具体的な機会の例を 1 つ示すという動詞接続の(43)～(47)のような用法と関わりが深いと思われる。

- (48) サウジアラビアを理解するには、万事につけて「均衡」と「コンセンサス」が大事なのだ。(2005.10.09 東京朝刊 11頁)
- (49) 昨年、退職した夫は、「やっと仕事を辞めたのだから……」などと、何かにつけて酒を飲む。(2003.02.24 東京朝刊 5頁)

3. 1. 6. F 漸進的変化

次のように、前件事態の進行過程と後件事態の進行過程が連動し、徐々に事態が進行することを表す用法があり、本稿では漸進的変化と呼ぶ。この用法はこれまで見てきた A～F とは意味が全く異なっている。

- (50) しかし、なかなかこれでもなおかつだんだんと小児科の先生が少なくなっているという現状を聞くにつけても、小児科の先生方をどう確保していくかということは非常に大きな問題になってまいりました。(参・151回)
- (51) 党が提起してより端を發した国有財産払い下げ等まつわる黒い霧問題以来、決算審議が脚光を浴びてくるにつけても、決算の重要性があらためて国民の間に認識されてきたことは、まことに喜ばしいことであります。(衆・55回)
- (52) 私どもは、この日ソの交渉に当って何よりも大切なことは、国交の正常化である、これがいろいろな問題を解決する一番賢明な道であると考えているので

ございますが、この点については、いろいろと具体的な問題が、今後進展するにつけても、国内にいろいろな面で起ってくると思います。(衆・22回)

(53) それだけに交渉当事者としては、問題の核心に入っていくにつけ、発言も慎重にならざるを得ないのは当然ではないでしょうか。(衆・61回)

(54) 今日の流行言葉で申しますれば、世の中が忙がしくなるにつけて、スピード化されて、文字は漸々に進化を遂げたのであります。

(大正・文字と秦の丞相李斯)

漸進的変化を表すこの用法は、ニツケテという形とよく似た形である次のようなニツレテの用法から類推によって発生した誤用と考えられる。(50)～(54)のいずれも、ニツレテと置き換えが可能である。

(55) 予報通り、東京は晴れていたのに、新幹線が京都に近づくにつれて空が暗くなってきた。(2011.06.24 東京朝刊 14頁)

3. 2. 形容詞接続の用法

形容詞接続の用法は実例が少ないが、日本語記述文法研究会編(2008)などにもあるように、現代語においては基本的に、意味的に対になる2つの形容詞A1・形容詞A2を用いて「A1ニツケA2ニツケ」という形で固定的に用いられる。新潮文庫の100冊・毎日新聞・国会会議録における調査範囲の用例は次の(56)(57)のように全て「良いにつけ悪いにつけ」(及びその文語的な形式「良きにつけ悪しきにつけ」)で、(58)のように前件述語の主格が「S1ノA1ニツケS2ノA2ニツケ」という形で現れたものも見られた。調査範囲を広げると、(59)(60)のような例も見出されるので、前件述語に用いられる形容詞の種類は完全に固定化しているわけではないが、現代語では前件述語として用いられる形容詞も「良い」「悪い」に著しく偏っていると見てよい。この用法では、後件事態の発生に関して、意味的に対になる2つの前件のいずれの場合もありうるということが表されるが、前件と後件の間に一定の関係を見出しにくい。

(56) 今日、日本の経済はGNP世界第二位という高度成長を遂げ、よきにつけあしきにつけ、内外の関心と注目を集めております。(衆・71回)

(57) 寮生たちは、そろって酒好きであった。寒さしのぎの茶碗酒に馴れた体質が遺伝するのか、みな生まれながらにつよいのである。よいにつけ、わるいにつけ、なにごとかあると、なによりもまず酒であった。(新潮・忍ぶ川)

(58) 電電、専売、国鉄民営化などのよきにつけ、円高、公約違反、人種差別発言な

どのあしきにつけ、あなたは手ごたえのある総理でありましたが、しかし、時の流れをとどめることはできません。 (衆・109回)

(59) うれしいにつけ、悲しいにつけ、歌は心を豊かにしてくれる。

(1998.08.02 地方版／愛知)

(60) かの地で暮らしたのは、わずか6年間。なのに今でも、楽しいにつけ苦しいにつけ、私の心を奮い立たせてくれる大きな原動力になっている。

(2011.12.20 大阪朝刊 16頁)

明治の文豪によって得た例は文語的な文体のものが多いが、次のように前件と後件が一对一で対応するものも見られる。ただ、この例は意味的に対になるまとまりが並んでおり、A1 ニツケ A2 ニツケという用法に連続的である。

(61) 只民子が可哀相でならなくなったのである。民子と僕との楽しい関係も此日の夜までは続かなく、十三日の星の光と共に全く消えうせて了った。嬉しいにつけても思いのたけは語りつくさず、憂き悲しいことに就ては勿論百分の一だも語りあわないで、二人の関係は闇の幕に這入って了ったのである。

(明治・野菊の墓)

意味的に対になる2つの述語について用いられる形式は、前項で扱った動詞接続のニツケにおける機会例示(二例型)と類似しているが、(56)～(61)のように後件は思考・感情に関わらない事態でも良い点で異なっている。

3. 3. ニツケテの派生関係とA感情の契機の用法における反例

前項まで、用法の記述に重点をおいて見てきたが、これらの用法の相互の関係について考察する必要がある。まず動詞接続のニツケテは、用例数が圧倒的に多いことからAが中心的用法になっていることは疑いない。意味的に対になる動詞V1と動詞V2を用いた「V1 ニツケ V2 ニツケ」という用法も、後件が思考・感情に関する内容となることからやはりAの用法として理解するのが妥当であろう。

B・C・Dは、後件述語のあり方に注目した分類であるが、いずれも前件が後件の契機となる感覚的刺激を意味するという特徴を持つ点でAと共通すること、及び国会会議録に用例が偏ることから、Aから主に話し言葉において派生的に用いられる用法であると考えられるものである。とすれば、B・C・Dは同じ経路で派生した用法ということになり、別々の枠組みに分類する必要はないということになるかもしれないが、派生のパターンとして、基本的には「不可避判断」「疑問」「主張」の3通りだけであるとい

うことを示す上では必要な分類である。後件述語に着目すると、これら3通り以外の、「～かもしれない」「～だろう」「らしい」「ようだ」といった他形式は例を見いだせなかったことは、派生の仕方にも一定の傾向があることを示している。

Eは、前件も後件も、特に有情の主体による感覚的刺激や思考・感情を表すものとは限らず、用例は話し言葉よりは小説に多く見られる用法である。このような点からEはA・B・C・Dとは異なる経路で派生したものと考えられ、その派生の一因として名詞接続のニツケテの影響があると考えた。

Fはニツレテという類似形式による類推で生まれたと考えられるものであり、A・B・C・D・Eとは意味・用法において全く異なったものである。

以上の諸用法について、B・C・D・E・FがAから派生するという点については現代語の観察によって説明できるものとした。その一方で、Aの基本的な性質のうち、「反復」の意味を持つという点と、前件が感覚的刺激を表すという2点には反例があることも指摘した。Aに関する2点の反例については、次節以降でニツケテの歴史的な側面を考慮に入れることにより説明することを試みたい。

4. 中古語のニツケテ

本節から、中古語のニツケテを見ていくことにする(注9)。まず動詞接続の用法を見ると、基本的に現代語の場合における感情の契機の用法と同様の用いられ方をしている。(62)では、前件の「浮舟の顔を見る」という感覚的刺激が契機となり、後件の「大君の顔そっくりだと思ひ出す」という思考・感情が起こると解される。(63)(64)も、やはり前件に感覚的刺激が述べられて、後件ではそれによって引き起こされる思考・感情が述べられている。

- (62) まことにいとよしあるまみのほど、髪ざしのわたり、かれをも、くはしくつくづくしも見たまはざりし御顔なれど[=大君の顔をじっくりご覧になったわけではないが]、[薫は]これ[=浮舟の顔]を見るにつけて、[薫は]ただそれと[大君の顔にそっくりだと]思ひ出でらるるに、例の、涙落ちぬ。(宿木・5・480)
- (63) [源氏は]いささかも他人と隔てあるさまにもものたまひなさず[=他人行儀な言い方はせず]、いみじく親めきて、「年ごろ御行く方を知らで、心にかけてぬ隙なく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢の心地して、過ぎにし方のことども取り添へ、忍びがたきに、えなむ聞こえられざりける」とて、御目おし拭ひたまふ。(玉鬘・3・124)
- (64) [源氏は]「…。いぎたなき人は[=よく眠っている幼い人は]、見たまへむにつけても、なかなかうき世のがれ難う思うたまへられぬべければ、心強う思ひた

まへなして、急ぎまかではべり」と聞こえたまふ。

(須磨・2-161)

ただ、現代語の A 感情の契機のニツケテが「反復」を意味し、前件が基本的に感覚的
刺激に限られるという性質を持つのに對し、中古語では必ずしもそのような性質がある
とは言えない。このことについては本節 2 項以降で順に考察する。

一方、形容詞接続の用法を見ると、興味深いことに、現代語のような「A1 ニツケ A2
ニツケ」という用法は見られず、(65)のように動詞接続の用法と同様の感情の契機の用
法で用いられている。また(66)のように、現代語ではほぼ用いられることのない形容動
詞接続の用法も少ないながらみられ、やはり感情の契機の用法である。現代語では、動
詞に接続するか形容詞に接続するかで用法にはっきりとした違いが見られたが、中古語
においてはいずれの用言についても感情の契機の用法として機能するので、本節では、
前節で行った現代語の考察のような、接続する用言ごとの分類はせずに考察を行うこと
にする。

(65) …前齋院はつれづれとながめたまふを、前なる桂の下風[齋院であったころを
思い出させて]なつかしきにつけても、若き人々は思ひ出づることどもあるに、
大殿より、「御禊の日はいかにもどやかに思さるらむ」と、とぶらひきこえさ
せたまへり。 (少女・3-11)

(66) さやうの事の思はずなるにつけて倦じたまへる[=嫌におなりになったのだ]、
と言はれたまはんことを思すなりけり。 (夕霧・4-446)

次の表 2 は、調査対象とした資料をおよそ成立年代順に並べ、それぞれ抽出できた用
例数を示したものである。上代から中古初期は例が見られず、中古中期以降の資料で見
られるようになる。このことから、ニツケテの接続助詞用法は、中古中期ごろ発達した
と考えられる(注 10)。本稿では、これらのうち源氏物語の全 177 例を分類・整理して
考察することにした。以降で用いる表 3・4・5・6 は、源氏物語におけるニツケテの例
の所在を日本古典文学全集の巻次と頁数によって示したものであり、各分類ごとの例数
の小計を[]内に示してある。

4. 1. 中古語のニツケテの基本的な用法

上述のとおり、中古語におけるニツケテは現代語のニツケテと同様に、感情の契機を
表すものが多い。全 177 例中 166 例(93.8%)は、本節冒頭に挙げた(62)～(64)や次の
(67)～(71)のように後件が思考・感情に関わるものである。

調査資料	ニツケテ類の例数			調査資料	ニツケテ類の例数		
	動詞接続	形容詞接続	合計		動詞接続	（うち形容動詞接続） 形容詞接続	合計
記紀歌謡	0	0	0	宇津保物語	21	0	21
万葉集	0	0	0	落窪物語	9	0	9
宣命	0	0	0	枕草子	0	1(1)	1
祝詞	0	0	0	源氏物語	154	23(7)	177
竹取物語	0	0	0	和泉式部日記	1	0	1
古今和歌集仮名序	0	0	0	栄花物語	53	4	57
伊勢物語	0	0	0	堤中納言物語	0	0	0
土佐日記	0	0	0	夜の寝覚	15	2(2)	17
大和物語	0	0	0	浜松中納言物語	21	5(1)	25
平仲物語	0	0	0	更級日記	1	1	2
多武峰少将物語	0	0	0	狭衣物語	16	6(3)	22
蜻蛉日記	5	1	6	藤原為房妻仮名書状	0	0	0

表 2：古代語の資料における用例分布数

- (67) うちとけぬ所にならひたまひて、よろづのこと心やすくなつかしく思さるるま
まに、おろかならぬ事どもを尽きせず契りのたまふを聞くにつけても、かくの
み言よきわざにやあらむと、あながちなりつる人の御気色も思ひ出でられて、
… (宿木・5-422)
- (68) かかる御事を見たまふるにつけて、命長きは心うく思うたまへらるる世の末に
もはべるかな。 (須磨・2-157)
- (69) 「かく袖ひつる [=こんなに涙で袖が濡れるとは]」などいふこともやありけむ、
耳馴れにたる [=ありふれた句なので]、なほあらじごとと見る [=このまま黙っ
てるのもまづいという気持ちから義理で言ったことばだと判断する]につけて
も、恨めしきまさりたまふ。 (総角・5-303)
- (70) あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて、かやうにけ近きほどまで

は思し寄りざりしものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思ひの外に
見たてまつるにつけてさへ、身のうさを思ひそふるが、あぢきなくもあるかな。

(総角・5-289)

- (71) 藪しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日
ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。 (早蕨・5-335)

表3は、後件述語の全例を挙げたものである。網掛けの11例を除き、他は思考・感情に関わる事態を表すものであって、現代語の状況と大きな差は無いといえる(注11)。後件が文末の位置に現れた例を見ると、意志・希望・命令を表す要素が現れておらず、現代語の後件のあり方と一致していることもわかる。こうしたことからニツケテは、通時的に見て意味と用法の根幹的な部分に大きな変容は無いといえるが、現代語の用法とは異なる例も少なからず見られる。以下で中古語におけるそのような注目すべき用法について見ていく。

4. 2. 後件が思考・感情ではない用法

典型的な用法は、(62)~(71)のようなものであり、感情の契機を表すものと捉えて問題ない。その一方、後件に思考・感情に関わる内容が現れないものが11例ある(注12)。

そのうち8例については、次の(72)~(76)のような用法で、前件が後件で述べられる主体の行動の機会を表すものである。前件内容を認識した有情の主体が、その認識を踏まえて何らかの行動を取ることを表すものであり、前件と後件の主体は一致している必要はない。

- (72) 「…」と恋ひ惚ぶ心なりければ、[中将が]たまさかにかくものしたまへるにつけても、めづらしく[中将が]あはれにおぼゆべかめる間はず語りも[妹尼は]し出でつべし。
(手習・6-294)

- (73) 「はじめのことは知らねど[=事の起こりはどうでもいとして]、[世間の人が]今はげに聞きにくくもてなすにつけて、立ちそめにし名の取り返さるるものにもあらず、をこがましきやうに、かへりては世人も言い漏らすなるを」などものははべれど…
(行幸・3-291)

- (74) …[薫が]げにいと人柄重りかに心にくきを、やむごとなき親王たち大臣の、御むすめを心ざしありてのたまふ[=娘婿にしようという気で声をおかけになつてくる]なるなども[薫は]聞き入れずなどあるにつけて、[玉鬘は]「その昔は若う心もとなきやうなりしかど、めやすくねびまさりぬべかめり」など言ひおはさ

動詞接続用法

○省略：(恥づかしうなん)1-103, (いかに)2-60, (つらくなむ)2-485, (えしも見過ごしたまふまじくや) 3-142, (をこがましうもや) 3-281, (心細くなん)4-54 [6]

○文末(引用文末も含む)：～恨めしくと思ふこともあらむ 1-157, 心もとまれ 1-188, 思はずことしげかりけり 1-397, 心をやみにくるかな 1-420(歌), 思しかへされける 1-425, なかなか心づくしなり 2-17, 思ひ出でられたまふ 2-61, あはれに思さる 2-85, 心苦しげなり 2-90, 移り変わるごとのみ多かり 2-107, あはれにおぼえたまひける 2-188, あぢきなきものなりけれ 2-189, みまもられたまふ 2-194, 見たてまつる 2-278, いみじと思ふ 2-294, 心もおかれたまはむ 2-301, 御心離れがたかりけり 2-364, あはれに思いつづける 3-66, 口惜しくのみ思し出づ 3-81, 思す 3-218, 心のみなん尽くされはべりける 3-278, 言ひ漏らすなるを 3-291, 思す 3-442, あはれに思さる 3-448, 悔しげなる事もめざましき思ひもおなづからうちまじるわざなめれ 4-26, おろかならず思ひきこえたまひけり 4-55, 聞こえむ 4-71, あり 4-124, 思ひつづけたまふ 4-124, おぼえたまひける 4-124, なまゆがむ心や添ひにたらん 4-145, 限りなく思ひきこえたまへり 4-158, 思ふ 4-164, 忘れね 4-165(歌), 胸うら騒ぎける 4-238, 言ひおはさうす 5-99, 聞こえ出づ 5-197, 御心に離るるをりなし 5-304, 夢のやうにのみおぼえたまふ 5-335, 思ひやしたまふらん 5-412, 口惜しけれ 6-41, うさも慰みはべる 6-43, 思ひ出づ 6-110, 思さむこと 6-150, 思ひ出でできこゆる 6-158, いと苦しいとほしけれ 6-171, 身のいと心憂きなり 6-179, あり難くあはれなりける 6-259, 問はず語りもし出づべし 6-295, あはれなれ 6-349, 思ひ出ではべる 6-349 [51]

○文末以外：胸のみふたがれど 1-204, 思いつづければ 2-29, 口惜しうおぼえたまふにやと 2-33, 乱り心地のみ動きてなむ 2-55, 念じかへしたまへど 2-70, かき連ね思されて 2-148, 思ひ知られて 2-156, 思うたまへらるる 2-157, のがれ難う思うたまへられぬければ 2-161, ゆかしきを 2-181(歌), ことぼれ出づれば 2-189, 身のほど知られて 2-229, 涙ぐまれて 2-239, 恋しさの慰む方なければ 2-249, 無徳なるを 2-338, 面目なければ 2-343, 忍びがたく思しめされて 2-443, つらかりける 2-456, 思ひ歩きたまへど 3-57, 涙絶ゆる時なく 3-83, 夢の心地して 3-124, 思ひこそやれ 3-133(歌), 思ひはてたまふにも 3-181, 諷めきこえたまへど 3-191, 言ひ伝へはべらむを 3-294, 見はべる 3-300, あはれに思うたまへらるる 3-300, 過ちたることと思へば 3-313, 口惜し 3-346, 思し知らるれば 3-368, 思し出でらるれば 3-385, 人のそねみあへかめるを 4-24, 深さこそまさらめ 4-44, あるまじけれど 4-56, つつましき 4-115, 忘れがたくて 4-161, 思ひわびて 4-208, 思すにぞ 4-245, 苦しく思さるれば 4-249, いとほしく思さる 4-250, 恥づかしく 4-262, 思し入れば 4-290, いとほしけれど 4-301, 思しまどふ 4-302, 推しはかりきこえさするに 4-319, 罪得ぬべく思さるれば 4-336, 過ぎにし罪ゆるしがたく 4-339, 思ひなしはべるを 4-422, うしろめたう思ひきこゆる 4-441, 思さるれど 4-491, 悲しさの改まるべくもあらぬに 4-507, 思し出づるに 4-509, 涙の雨のみ降りまされば 4-514, 思し出づるに 4-518, 思しくらべらるるに 4-518, 心に驚かれ 4-520, 口惜しければ 5-46, 思ひたまへよる 5-61, 思ひたまへ出づれば 5-71, たへがたきこと多かる 5-110, 思す 5-232, 思ひ乱れはべるぞや 5-236, 思ひそふる 5-289, 恨めしきまさりたまふ 5-303, 恋しく 5-303, 憚りて 5-328, 思せば推しはかられはべりぬれ 5-398, 5-341, 思ひ出でつつ 5-344, 乱ればべりて 5-346, 口惜しきことぞいとまさりける 5-358, 女々しくもの狂ほしく 5-376, 恋しく悲しく思ひきこえたまふ 5-386, 心惑ひの絶えせぬも 5-387, 念ずべかめれど 5-397, 思ひ出でられて 5-422, 紛ることもやあらんなど 5-435, 思ふを 5-443, 御心動きおはしますらん 5-444, 思ひ出でらるるに 5-480, 胸つぶれて 6-39, 心にくもある 6-41, 思ひ出でられて 6-81, 悲しうおぼえて 6-87, (涙に)ぬるる 6-88(歌), 棄てがたければ 6-153, いとどいみじきに 6-204, 思せど 6-208, 思ひたまへれば 6-218, 聞きたまへば 6-221, 目の前の涙にくれはべりて 6-229, 人ゆかしき御癖やまで 6-253, 涙ぐみて 6-298, あたらしがりつつ 6-331, めづらかなる心地すれど 6-348, うたてはべればこそ 6-350, 心えず思されぬべきに 6-360 [97]

形容詞接続用法

○文末：いとど惜しげなる人の御身なり 2-27, 思ひてのたまふ 3-389, おろかならず思ひ知らる 3-443, もの思ふことさまさまなり 6-168 [4]

○文末以外：ただならず思して 1-384, 嘆きたまふに 1-397, いとへども 2-125(歌), 嘆きたまふを 2-252, 思ひ出づること多かるに 3-11, 恋しきを 3-322, 安からず思ひつつ 3-326, 憊ばるること多く 4-371, 厭ふ 4-445, おごりて 4-502, 心細く思しわたりつるに 5-461, ものあはれも知らぬ 6-209 [12]

形容動詞接続用法

○文末：安からずもの思ほす 1-401, ありがたう思ひくらべられたまふ 1-429, 苦しげなり 2-147, 倦じたまへる 4-446, 失ひたまへる 6-223 [5]

○文末以外：ゆかしく思したる 4-21, つらしとや見たまふらむ 5-378 [2]

表 3：後件述語の全例

うず。

(竹河・5-100)

- (75) 姫君は、東面にひき入りて大殿籠りにけるを、宰相の君の消息つたへにみざり入りたるにつけて、[源氏は]「…」など諫めきこえたまへど… (蛍・3-191)
- (76) くだくだしきなほ人の仲らひ[=とるにたらぬ身分卑しい者たちの色恋沙汰]に似たることにはべれば、[私が]明かさんにつけても、らうがはしう人言ひ伝へはべらむを、中將の朝臣にだにまだわかまへ知らせはべらず。(行幸・3-294)

後件に思考・感情に関わる事態が現れない 11 例のうち、残りの 3 例は次のようなものである。(77)は、現代語の C 疑問の契機の用法と類似しており、古代においても、感情の契機の用法から類似のプロセスをたどって派生したものと考えられる。(78)は、現代語の E 機会例示の用法と類似しており、これも同様に古代における(80)のような名詞接続のニツケテからの類推によって派生したものか考えられる。(79)は後件の主体が有情物でもなく、現代語に見られた派生関係の枠組みを応用しても説明することが難しいが、後件の「あはれにはかなく」という部分に主体の感情があるもの解せは感情の契機を表すものとして分類することも可能かと思われる。

- (77) 世の中を思ひ知るにつけても、昔よりつらき御心をこころ思ひつめつる年ごろのはてに[=昔から薄情なお心づかいを何度も味わわされてきた長い年月の果てに]、[院の]あはれに悲しき御事をさしおきて、いかなる昔語をか聞こえむ。
(若菜上・4-71)
- (78) はかなきことにても、もの心得ずひがひがしき人は、たちまじらふにつけて、人のためさへからきことありかし。
(若菜上・4-124)
- (79) …思し立つ筋[=出家の決意]はいと難けれど、内裏わたりを見たまふにつけても、世のありさまあはれにはかなく、移り変ることのみ多かり。
(賢木・2-107)
- (80) よろづの事につけて、浄めといふことはべれば、いかがはさもとり返し濯いたまはざらむ、とは思ひたまへながら、かう口惜しき濁りの末に、待ちとり深う澄むべき水こそ出で来難かべい世なれ。何ごとにつけても末になれば、落ちゆくけぢめこそ安くはべめれ。
(行幸・3-291)

4. 3. 中古語のニツケテに「反復」の意味はあるか

現代語のニツケテにおける A 感情の契機の用法は、例外的な用例もわずかに見られるが、基本的には前件にも後件にも動作性の述語が現れ、事態が繰り返して発生するという「反復」の意味をもつものである。中古語では、前項で扱った 11 例以外の 166 例は接

続する用言が何であれ感情の契機を表すものと見なしたが、この 166 例の用法をよく観察すると、中古語においては「反復」の意味が確立していないと考えるのが妥当であると思われる。以下で、前件述語・後件述語・文の意味に着目して、そのことについて考察する。

表 4 は前件述語を助動詞の後接の有無により二分しそれぞれの例を示したものである。助動詞が前件述語に後接したものは助動詞の部分を□で囲い、前件と後件の主体が異なっているものは下線を施し(表 5 で「異主体」に分類されたもの該当する)、感情の契機を表さない 11 例は網掛けにした。

まず、感情の契機を表す 166 例の中で、前件には動詞だけでなく形容詞や形容動詞が用いられたものが 22 例(約 13.3%)ある点に注目したい。(81)や(82)のように形容詞述語で表される事態は状態的なこととして理解されるため、動作の繰り返しを表す反復の解釈が出にくい。これらに加え、(83)や(84)のような、状態性の動詞に付いた例も見られる。

- (81) 東宮の女御、[源氏が]かくめでたきにつけても、ただならず思して、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心うし、と耳とどめけり。(紅葉賀・1-385)
- (82) なかなかにもうち出でけるかな[=なまじ打ち明けてしまわねばよかった]、と口惜しきにつけても、かのいますこし身にしみておぼえし御けはひを[=玉鬘よりも身にしみて忘れがたかった紫の上の御有様を]、かばかりの物越しにても、ほのかに御声をだに、いかならむついでにか聞かむ、と安からず思ひつつ、[父大臣が]御前に参りたまへれば、[源氏は]出でたまひて、[姫君からの]御返りなど聞こえたまふ。(藤袴・3-326)
- (83) …と聞こえかはしたまふ御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがな、と思さるれど、心にかなはぬことなれば、かけとめむ方なきぞ悲しかりける。(御法・4-491)
- (84) ここには、かかる世の常の色あひなど、久しく忘れにければ、なほなほしくはべるにつけても、昔の人あらましかばなど思ひ出ではべる。(手習・6-349)

また、次のように後件に状態性述語が現れる例もある程度見られる。表 3 で確認すると、感情の契機の用法の 166 例のうち下線を付した 27 例(16.3%)が状態性述語として認められるものである。

- (85) 「…大将の、よろづのことに心の移らぬよしを愁へつつ、浅からぬ御心のさまを見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」とのたまへば、…(東屋・6-41)

前件述語（異主語のものに下線を付した。） 助動詞後接せず [43]	<p> <u>動詞接続用法</u>：露分け入りたまふ 1-103, たのむ 1-157, かかる 1-188, 渡りありく 1-204, ほの見たまふ 1-397, 見る 1-420(歌), 御目のとまる 1-425, つれなく過ぎたまふ 2-17, 聞きたまふ 2-29, 見たまふ 2-33, 立ち出ではべる 2-55, ほど経る 2-60, 見る 2-61, 見たまふ 2-107, 思ひ出できこえたまふ 2-148, 見たてまつる 2-156, 見たまふる 2-157, ある 2-189, のたまはする 2-189, 思ひやりたまふ 2-194, 尋ね知りたまふ 2-239, 見たまふ 2-249, のたまふ 2-278, みゆる 2-294, 入りたまふ 2-338, 御覧ずる 2-443, 見たてまつる 2-456, 見る 2-485, 目とまる 3-57, のたまはする 3-66, 見たまひ重ねる 3-81, 問ひたまふ 3-83, 見たてまつる 3-124, いふ 3-133(歌), 思はず 3-142 聞こゆる 3-181, 聞きたまふ 3-218, とある 3-278, 聞きにくくもてなす 3-291, 人数になりはべる 3-300, 見苦しと見はべる 3-300, 言ふ 3-313, 聞きたまふ 3-368, 見たまふ 3-385, のたまふ 5-398, 思ひきこえたまふ 3-442, 見たまふ 3-448, とり分ぎきこえさせたまふ 4-24, 見ゆる 4-26, 住みはてたまふ 4-55, かかる 4-56, 思ひ知る 4-71, たちまじらふ 4-124, のたまふ 4-124, しりうちきこえたまふ 4-124, 思ふ 4-145, 見たまふ 4-161, 見る 4-164, 見る 4-165(歌), まさる 4-208, かかる 4-238, 思し乱るる 4-245, 思ひ放ちたまふ 4-249, 見たてまつりたまふ 4-250, かかる 4-290, 思ふ 4-301, 見たまふ 4-302, 見聞きはべる 4-319, 見たてまつりたまふ 4-336, 思す 4-339, 聞く 4-441, かひある 4-491, 見たまふ 4-507, 御聖心の深くなりゆく 4-509, うちほのめきたまふ 4-514, 見たまふ 4-518, 聞きはべる 4-520, はなやかにもなしたまふ 5-46, すすめたまふ 5-61, 聞き入れずなどある 5-99, あり降る 5-110, 塵かき払ひなどする 5-197, 見たてまつる 5-289, 見る 5-303, ほど経る 5-303, 見たまふ 5-304, 見たまふ 5-335, おはする 5-344, のたまはする 5-346, 思し出づる 5-358, 思ひよる 5-376, 思ひ乱れたまふ 5-386, 見たまふる 5-387, 聞く 5-397, 見る 5-412, 聞く 5-422, ものする 5-443, 御覧ずる 5-444, 見る 5-480, 言ふ 6-39, 見る 6-41, 見る 6-81, はしたなくおぼゆる 6-87, 見る 6-88(歌), 出で立ちたまふ 6-110, 見たてまつる 6-153, のたまふ 6-158, まどひみではべる 6-171, 思ふ 6-179, 来たる 6-204, 見たまふ 6-208, 思ひたまふる 6-229, 恋ひたまふ 6-253, 思ふ 6-259, 言ふ 6-298, 着せてたまつる 6-331, 見る 6-348, 思しいそぐ 6-349, なほなほしくはべる 6-349, 思ひ出づる 6-350 [120] </p> <p> <u>形容詞接続用法</u>：かくめでたき 1-384, 世のさだめなき 1-397, かたじけなき 2-27, うき 2-125(歌), 世の常なき 2-252, なつかしき 3-11, なつかしき 3-322, 口惜しき 3-326, うつくしき 3-389, はればれしき 3-443, 亡き 4-371, うき 4-445, よき 4-502, 悩ましき 5-461, しげき 6-168, 心弱き 6-209 [16] </p> <p> <u>形容動詞接続用法</u>：いかなる 1-401, かやうなる 1-429, いかなる 2-147, いかなる 4-21, 思はずなる 4-446, かやうなる 5-378, さやうなる 6-223 [7] </p>
	助動詞後接 [34]

表 4：前件述語の全例

- (86) 「…さばかり上の思ひいたづききこえさせたまふものを、ママがこの御いそぎに心を入れて、まどひゐてはべるにつけても、それよりこなたに、と聞こえさせたまふ御ことこそ、いと苦しくいとほしけれ」と言ふに、…（浮舟・6-171）
- (87) 人、あやしと思ふらんと思せど、見むにつけても、いとどほればれしき方 [= 老いぼれた様] 恥づかしく、見むには、また、わが心もただならずや、と思し返されつつ、やがて、月ごろ参りたまはぬをも咎めなし。（若菜下・4-262）

以上のように、前件や後件に状態性の述語が現れる例が少なからず見られることは、ニツケテが反復の意味を持たないということの根拠になる。さらに、次のように、文の意味から考えて反復的な事態を表しているとは考えられないものもある。(88)では、「この桜が何度も老木になった」という解釈はできない。また、(89)では、同じ人に対して何度も「こんな人もいたのか」と思って身の程を知る、とは考えにくい。(90)では、何度も人妻に落ち着くとは考えられないし、(91)では喪が明けたのに何度も喪服を脱ぐという解釈は成り立たない。(92)も、前件の「京に移る」は転居に関することであり、反復するとは考えられない。

- (88) 「この桜の老木になりけるにつけても、過ぎにける齢を、思ひたまへ出づれば、あまたの人に後れ侍りにける、身の愁へも、とめがたうこそ」など、泣きみ笑ひみ、聞こえたまひて、例よりは、のどやかにおはす。（竹河・5-71）
- (89) 正身 [= 明石の入道の娘] は、おしなべての人だに、めやすきは見えぬ世界に、世には、かかる人もおはしけりと、見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いとほるかにぞ思ひ聞えける。（明石・229）
- (90) 尚侍の君も、実の親をばさるべき契りばかりに思ひきこえたまひて、あり難くこまかなりし御心ばえを、年月にそへて、かく世に住みはてたまふにつけても [= 人妻として落ち着く]、おろかならず思ひきこえたまひけり。（若菜上・p55）
- (91) 御服などはてて、脱ぎ棄てたまへるにつけても、片時も後れたてまつらむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどを思すに、いみじく思ひの外なる身のうさと、泣き沈み給へる御さまども、いと苦しげなり。（総角・p232）
- (92) さても、おはしまさむ [= 京に移る] につけても、まことに思ひうしろみきこえん方は、また誰かは、と思せば、御渡りの事どもも心まうけさせたまふ。（早蕨・p341）

こうしたことから、感情の契機を表すニツケテは、中古の段階では反復の意味を持た

ず、一回的事態を表す際にも普通に用いられるものだったと考えるのが妥当であろう。現代語においても、前件・後件に状態性の述語が現れる例があったり、文の意味から考えて一回的な事態を表していると解釈するしかない例がわずかながら見られたが、このことは通時的観点からすれば、反復の意味を持たない古代語の用法から移行しきれていないためのものであると捉えるのが妥当であろう。

4. 4. 前件と後件の主体一致に関して

現代語におけるニツケテの A 感情の契機の用法では、前件と後件とにおける主語が一致しない例は 426 例のうち 11 例(約 2.6%)であり、標準的な用法とは言えないものであった。それに対し、中古語では前件の主体と後件の主体が一致しない次のような例が普通にみられる。

- (93) 身のおほえまさるにつけても、[柏木は]思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。(若菜・下・4-208)
- (94) 春鶯囀舞ふほどに、昔の花の宴のほど思し出でて、院の帝も、「またさばかりのこと見てんや」とのたまはするにつけて、[源氏は]そのことあはれに思しつづけらる。(少女・3-66)
- (95) かの大臣、何ごとにつけても際々しう、すこしもかたはなるさまのことを思し忍ばずものしたまふ御心ざまを、さて思ひ隈なく、けざやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、[源氏が]をこがましようもやなど、思しかへさふ。(行幸・3-281)
- (96) …「宿をば離れじ、と思ふ心深くはべるを、近く、など[薫が]のたまはするにつけても、[私は]よろづに乱れはべりて、聞こえさせやるべき方もなく」など、所どころ言ひ消ちて、…(早蕨・5-346)

表 5 は、前件と後件の主体の一致状況を一覧にしたもので、不一致のものを「異主体」、一致のものを「同主体」としている。網掛けにした感情の契機以外の用法 11 例を除くと、異主体：同主体 = 77 例：89 例 = 約 46.4%：約 53.6%となっており同主体である例のほうがわずかに優勢ではあるが、ほぼ拮抗している状況が見て取れる。中古語においても、後件の主体による思考と感情が発生する直接的な要因は、主体が何らかの事態を知覚することであるため、前件には後件と共通する主体の知覚動作が「見る」「聞く」などの形で述部として現れる場合が多い。しかし、中古語では、そのような感情の契機となる知覚動作を一々述べなくても、前件内容が後件主体の認識対象となっていれば良かったものと考えられる。このような前件と後件の主体が一致しない例では、当然のことな

がら前件述語として現れる動詞は知覚動詞以外のものが普通に見られる(表 4 下線を施した述語)。

主語	異主体	動詞接続用法 1-103,1-157,1-188,1-204,1-397,2-17,2-29,2-60,2-70,2-85,2-90,2-107,2-18 1,2-189,2-189,2-278,2-294,2-301,2-338,2-343,3-66,3-83,3-133,3-181,3-19 1,3-278,3-281,3-291,3-313,3-346,3-374,4-26,4-44,4-54,4-56,4-115,4-124,4- 124,4-158,4-208,4-238,4-290,4-491,5-46,5-61,5-71,5-99,5-110,5-236,5-30 3,5-398,5-341,5-346,6-39,6-41,6-88,6-150,6-158,6-171,6-204,6-259,6-29 5,6-298,6-349,6-349,6-360 [66] 形容詞接続用法 1-384,1-397,2-27,2-125,2-252,3-11,3-322,3-326,3-389,4-371,4-445,4-502, 6-168,6-209 [14] 形容動詞接続用法: 1-401,2-147,4-21,4-446,5-378,6-228 [6]
	86	
感情要因の用法以外を網掛けにした	同主体	動詞接続用法 1-420,1-425,2-33,2-55,2-61,2-148,2-156,2-157,2-161,2-188,2-194,2-229,2 -239,2-249,2-364,2-443,2-456,2-485,3-57,3-81,3-124,3-142,3-218,3-291,3 -300,3-300,3-368,3-385,3-442,3-448,4-55,4-71,4-124,4-145,4-161,4-164,4 -165,4-245,4-249,4-250,4-262,4-301,4-302,4-319,4-336,4-339,4-422,4-44 1,4-507,4-509,4-514,4-518,4-518,4-520,5-197,5-232,5-289,5-303,5-304,5- 328,5-335,5-344,5-358,5-376,5-386,5-387,5-397,5-412,5-422,5-435,5-44 3,5-444,5-480,6-41,6-43,6-81,6-87,6-110,6-153,6-179,6-208,6-218,6-221, 6-229,6-253,6-331,6-348,6-350 [88] 形容詞接続用法: 3-443,5-461 [2] 形容動詞接続用法: 1-429 [1]
	91	

表 5: 前件と後件の主体の一致・不一致

4. 5. 前件述語に後接する助動詞について

表 4 にあるように、前件述語に助動詞が後接する用例が 34 例見られる。レル・ラレは現代語でも次のような例を見出せたが、基本的に他の助動詞が付くことはない。

(97) けんかの仲裁もしないから、子ザルたちに人気がない。人望ならぬ「猿望」を欠いている。繰り上げのボスや「猿望」のなさを聞かされるにつけ、まるでどこかの国の政界を見ているような気分になってくる。

(2010.05.03 地方版/宮城 21 頁)

(98) 明日へのエネルギーを感じさせない政権政党の鈍感な意識を見せられるにつけ、政治の梅雨明けは遠いと感じざるを得ない。

(1998.07.28 東京朝刊 29 頁)

助動詞の後接した例を整理すると、ル／ラル4例、タリ2例、リ7例、ズ1例(注13)、ベシ1例、キ2例、ケリ1例、ム15例の他にベシにメリが承接したベカメリ1例となっており、些少な例も考慮に入れると、ニツケテの前件には命題内容からモダリティ的な要素まで広く入りうるものだったことになる。

- (99) …かくおはしましたるにつけても、悲しいみじきことを、…(蜻蛉・6-221)
- (100) 源氏の、うちつづき後にゐたまふべきことを、世人飽かず思へるにつけても、冷泉院の後は、…(若菜下・4-158)
- (101) 見はてぬにつけて、心にくくもある世にこそは、と思へど、…(東屋・6-41)
- (102) …赦されたまひて、参りたまふべきにつけても、なほ心にしみにし方ぞあはれにおぼえたまひける。(須磨・2-188)
- (103) 院には、かの櫛の箱の御返り御覽ぜしにつけても、御心離れがたかりけり。(絵合・2-364)
- (104) 「この桜の老木になりにけるにつけても、過ぎにける齢を、思ひたまへ出づれば、…(竹河・5-71)
- (105) 人のありさまを見んにつけて、紛ることもやあらなど思ひ寄るをりをりはべれど、…(宿木・5-435)
- (106) …「なほ、これかれ、[私を]うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつけて、思ひ乱れはべるぞや」と、言ひさしたまひつ。(総角・5-236)

従属節内に現れる要素を階層的に分類する試みは、現代語において南(1974)とその修正を行った田窪(1987)、古代語において小田(2006)といった研究があり、ニツケテもそうした枠組みから捉える必要があるかと思われるが、本稿の調査で収集できた用例は多くないので別の機会に考えることとしたい。

5. 中古語と現代語のまとめと考察

現代語のニツケテも中古語のニツケテも、その用法の中心は、前件が後件における思考・感情の契機を表すものであると言って良い。しかし、現代語における形容詞接続の用法はこの感情の契機の用法から変容し、慣用表現的なものに固定化してほぼ一つの副詞に近い用法で用いられるようになっており、また形容動詞接続の用法は標準的な用法ではなくなっている。

例数の少ない周辺的な用法は、現代語においては中心的な用法である A 感情の契機の用法から派生するものであり、中古語においても同様の派生があると考えた。中古語では、前件が後件における有情物主体の行動の機会を表す用法が 8 例見られたが、これ

は現代語の E 機会例示のような、前件が複数想定される機会の一例に過ぎないという含意は無いものであり、現代語とは異なる派生があったかと考えられるものである。

そのような諸用法の存在を踏まえ、中心的な用法である感情の契機の用法について詳しく見ると、現代語では、前件も後件も動作性述語が現れて反復の意味を持つと考えられるのに対し、中古語では、前件と後件に状態性述語が普通に現れて、意味的にも一回的事態と考えるべき例が見られることから、反復の意味は確立していないと考えられる。また、現代語では、前件は後件と共通する有情物が主体となって述部が感覚的刺激を表すという用法に固定化しているのに対し、中古語では前件と後件の主体が異なる例が普通に見られることから、前件は述部に知覚動詞などを用いなくても後件の主体の認識内容になりうるものと考えられる。

以上のような状況から、派生的な諸用法を抜きにして感情の契機を表すニツケテの通時的な変遷のありようを考えると、中古の、動詞・形容詞・形容動詞のいずれにも接続できて後件の思考・感情の契機を表すことができるという制限の少ない段階から、現代の、動詞のみに接続して、前件と後件の主体が一致する反復的事態のみにおいて後件の思考・感情の契機を表すという非常に制限された段階へと移行する過程が想定される。そのような用法の固定化の過程において、前件述語に後接できる助動詞の種類も減っていくことになったのであろう。

もう少し抽象的で大雑把な見方をするならば、複文から単文への移行過程として捉えることも可能かもしれない。感情の契機を表す用法のうち、動詞接続の場合は、前件に文相当の内容が自由に現れたが、やがて前件述語の固定化が起り、[名詞句]ヲ見ルニツケテ・[名詞句]ヲ聞クニツケテという形の格助詞相当の複合辞へとさらに変容しつつあると捉えられないだろうか。また、形容詞接続の場合は、「A1 ニツケ A2 ニツケ」という形式で一つの副詞句となり、稀に「S1 ノ A1 ニツケ S2 ノ A2 ニツケ」というように主格が分化することはあっても、ほぼ固定化して単文の一要素を担うに過ぎないものとなってきている。形容動詞接続の用法もほぼ減んでいることを考え合わせると、ニツケテは、中古から現代にかけて複文を形成する力が徐々に衰えていく過程があるのではないかと想定されるのである。

おわりに

本稿では、複合辞ニツケテの接続助詞用法について、実例に依拠しながらその意味と用法を記述し、派生関係や歴史的変遷に関する一定の見通しを立てた。

ただ、用例の分類において客観的な基準を立てにくかったこともあって、筆者の主観的な判断に委ねざるをえない部分も多くなったため、データの厳密さを欠いたかもしれない。また、中古語における前件述語に付く助動詞の種類や、ニツケテに含まれる接続

助詞テの有無、後接する係助詞の種類など考察の行き届かなかった部分もある。さらに、歴史的な変遷を詳しく見ていくためには中世・近世の用法を調査する必要もある。今後、こうした課題についても考えを深めて行きたい。

注

(注1) 複合辞と認定する基準は、必ずしも定まっていないが(松木 1990,2012)、山口(1980)は「つく」などの本来抽象度の高い動詞の意義が「に」格との相関において格助詞・接続助詞相当の作用性を担うに至ったもの」と指摘しており、また下二段の他動詞「つく」では通常必須であるヲ格項が失われていることから、ニツケテは実質的な用法が希薄化した複合辞の一つとして扱う。

(注2) 中世前期から近世後期においても次のように実例を指摘できる。

(i) 其ノ後、此ノ紅梅ノ木ノ下ヲ見ルニ付ケテモ、惜ミ悲ム事无限シ。

(今昔物語集・巻十三・p.267)

(ii) その上鎮西から菊池、原田松浦党五百余艘の船に乗って、屋島へ寄ると、聞こえたれば：これを聞き、かれを聞くにつけても、心をまどわし、魂を消すよりほかのことわなかった。

(天草版平家物語・p.324)

(iii) あいつが顔附背恰好成人するに従ひ。死なれた旦那に生寫し。あれあの辻に立ったるなりを見るに付け。與兵衛めは追出さず。旦那を追出す心がして。勿體ない。

(女殺油地獄・p.411)

(iv) あいつはおれを、しつた顔していつたが、おら、つゝもど、あつた事ない。兎角おらを、しつた顔したがる人のあがるを見るにつけても、はやく行たい。

(遊子方言・p.274)

(注3) 以下、現代語の用例の出典表記の略表記は次のとおり：「明治」= CD-ROM 版明治の文豪／「大正」= CD-ROM 版大正の文豪／「新潮」= CD-ROM 版新潮文庫の100冊／「衆・～回」「参・～回」= 衆議院と参議院の国会会議録(本会議)の会次／「年月日 刊行情報 項数」= 毎日新聞

(注4) 本稿では「A ニツケ(テモ)B」という場合の語句Aを前件、語句Bを後件と呼ぶ。ただし、Bは前件による修飾を受ける節を指すものであり、必ずしも文末には現れない。次の例文で言えば、「見る」までが前件、「痛感するものであります」までが後件であり、「政府・自民党が」以降は本稿の考察の対象外である。

・ ここまで円高不況の様相が広がっている事態を見るにつけ、本年度前半にお

る大幅減税が必要であったことを痛感するものでありますが、政府・自民党が与野党間の合意を尊重するというのであれば、少なくとも本補正予算案に所得税減税及び政策減税が盛り込まれるのが筋であったのであります。

(衆・107回)

(注5) 丁寧形には接続しないとされるが、その説明に従えば次のような事例は誤用ということになる。本稿の調査範囲でも、このような接続は3例しかなく、しかも国会会議録の口頭語であるから、誤用と見るのが正しいのかもしれない。

・ 近頃十八歳から二十一歳くらいの子供が兇悪犯罪をいたしますにつけて、漸く世人はあの世代の子供には何か共通した欠陥があるのではないかという疑いを持ち始めました。(参・9回)

(注6) 新潮文庫の100冊は、翻訳と現代語訳を除いた日本人作家による作品のみを対象とし、さらに明治の文豪・大正の文豪と重複する小説を除外した。国会会議録は、衆議院本会議の第1回～第180回(第180回は第17号まで)と参議院本会議の第1回～第180回(第180回は第9号まで)。毎日新聞は、2011年分の全面。なお同一内容の記事があることによる重複した用例は1例として計上している。

(注7) 形容動詞接続のニツケテは調査資料の対象範囲で確認できたのは次の2例のみであり、標準的な用法とは思われないので本稿では扱わない。

(i) 実を申すと此処へ来る途中でもその事ばかり考える、蛇の橋も幸になし、蛙の林もなかったが、道が難渋なにつけても、汗が流れて心持が悪いにつけても、今更行脚もつまらない。(明治・高野聖)

(ii) 次に、委員会における審議の状況について、簡単に申し上げますれば、先ず第一に、税金の徴収については近来とかくの批評がある、これは沢山出ているのであるが、今回法規を改正して、所属職員の職責の厳正を確保するために、国税庁の監督官に司法警察権を與えまして、そして税務官吏の犯罪取締に努力せしめることとしておるのでありますけれども、これら監督官の職責が一層重大なるにつけても、監督官の人選については政府の如何なる成算を有しているかという点でありまして、これに対しまして政府は、その人の平素の働き又その素行等を十分に検討いたしまして最も適当な人を選ぶつもりであるという説明がありました。(参・7回)

(注8) 次の例は3つの動詞が現れており、一例型のニツケテが列挙されたものかもしれないが、二例型で計上してある。

- ・ 郵便局の前を通るにつけ、郵便函を見るにつけ、脚夫に行き遇うにつけ、僕は貴女を聯想しない事はありません。(大正・或る女)

(注9) 用例は、必要に応じて[]内に訳注を補い、源氏物語からの引用は帖名・全集の巻次と該当ページで出典を表記した。また、引用の際に一部表記を改めた。

(注10) 名詞接続のニツケテは次のように中古前期から見られるが、名詞接続の用法と、用言に接続する用法との関係性については本稿では取り扱わない。

- ・ この折に、ある人々折節につけて、唐歌ども、時に似つかはしき言ふ。

(土佐日記・十二月二十七日)

(注11) 後件が省略されている6例も感情の契機の用法に計上した。

(注12) 後件は思考・感情に関わるものではないと認定する基準は曖昧であり、11例という数字は必ずしも確実なものとはいえないが、そうした実例がある程度見られることは事実と考えてよいと思われる。

(注13) ズが前件述語に付いた「見はてぬにつけて」は、「見はてぬ」がこの形で慣用的に用いられていた可能性があるので、助動詞として数えるべきではないかもしれない。思考・感情の要因となる事態は、必ずしも「何かが起こる」という肯定命題に限らず、「何かが起こらない」という否定命題であっても不思議ではないが、古代語においても現代語においても実際に使用されることはまずない点に注意される。

調査資料

○上代

続日本紀宣命：北川和秀編(1983)『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館／元興寺縁起所載宣命・正倉院文書正集第四十四巻所収宣命：青木紀元校注(1978)『神道大系 古典註釈編六 祝詞・宣命註釈』神道大系編纂会／延喜式祝詞(九条家本)：沖森卓也編(1995)『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』汲古書院／日本書紀歌謡(寛文九年刊本)：大野晋(1953)『上代仮名遣の研究』岩波書店／古事記歌謡(本居宣長校訂本)：日本古典文学大系／万葉集(西本願寺本)：日本古典文学全集

○中古

・ 源氏物語(大島本)：日本古典文学全集／古今和歌集仮名序(元永本)：築島裕・石川祥子・小倉正一・土井光祐・徳永良次編(1994)『東京国立博物館蔵本 古今和歌集総索引』

汲古書院／竹取物語(武藤本)・伊勢物語(三条西家旧蔵本)・大和物語(尊經閣旧蔵伝為家筆本)・蜻蛉日記(桂宮本)・落窪物語(寛政六年刊本)・和泉式部日記(三条西実隆筆本)・栄花物語(梅沢本)・更級日記(御物本)・夜の寝覚(島原本)・浜松中納言物語(榊原芳野旧蔵本)・狭衣物語(内閣文庫本)：日本古典文学大系／土佐日記(青谿書屋本)：日本大学文理学部国文学研究室(1967)『土佐日記総索引』日本大学文理学部人文科学研究所／平仲物語：(静嘉堂文庫蔵本)：山田巖・水野清・山内潤三・木村晟編(1969)『平中物語：本文と索引』洛文社／堤中納言物語(広島大学附属図書館本)：森口年光(1982)『堤中納言物語総索引』勉誠社／藤原為房妻仮名書状(『不空三蔵表制集』紙背文書)・『灌頂阿闍梨宣旨官牒』紙背文書)：加藤静子・高橋宏幸・中川美和・竹村志津子(2000)「藤原為房妻仮名書状」試解(1)『都留文科大学大学院紀要』7 pp.1-16、加藤静子・高橋宏幸・中川美和(2001)「同(2)」『同』5 pp.1-14 同(2002)「同(3)」『同』6 pp.1-17、同(2003)「同(4)」『同』7 pp.35-46 / 多武峰少将物語(酒井家旧蔵本)：小久保崇明編(1972)『多武峰少将物語 本文及び総索引』笠間書院／宇津保物語(前田家本)：室城秀之他編(1999)『うつほ物語の総合研究 本文編 1』勉誠出版／枕草子(岩瀬文庫本)：榊原邦彦編(1994)『枕草子 本文及び総索引』和泉書院

○中世・近世

今昔物語集・女殺油地獄・遊子方言：日本古典文学大系／天草版平家物語：江口正弘(1986)『天草版平家物語 対照本文及び総索引 本文篇』明治書院

○現代

・毎日：毎日新聞／大正：CD-ROM 版大正の文豪／明治：CD-ROM 版明治の文豪／新潮：CD-ROM 版新潮文庫の100冊

・国会会議録：

国立国会図書館「国会会議録検索システム」衆参の本会議(2011年5月11日閲覧)
http://kokkai.ndl.go.jp/cgi-bin/KENSAKU/swk_srch.cgi?SESSION=18225&MODE=1

参考文献

- 小田勝(2006)『古代語構文の研究』おうふう
岡本牧子・氏原庸子(2008)『日本語表現文型辞典』Jリサーチ出版
グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6・5
田中寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法6』くろしお出版
藤田保幸・山崎誠(2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
藤田保幸・山崎誠編(2006)『複合辞研究の現在』和泉書院

- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2
- 松木正恵(2012)「複合辞研究史X 複合辞認定に対する問題提起と研究の方向性」『学術研究(人文科学・社会科学編)』60(早稲田大学教育・総合科学学術院)
- 南不二男(1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク
- 山口堯二(1980) 『古代接続法の研究』明治書院
- 山口堯二(2000) 『構文史論考』和泉書院

(つじもと おうすけ 大学院人文社会系研究科 修士課程1年)